

尼崎公害患者のライフコース研究に向けて

——ライフコース研究とライフヒストリー調査——

杉本久未子

SUGIMOTO Kumiko

1 はじめに

「僕の人生は、60歳まで喘息の病気で苦しい思いをしましたけど、恵まれた人生じゃなかったかと。現在こうしておられるのも、いろんな人に助けてもらってきました。会社にいる時は景気よかったし、…子供にも恵まれましたし。」

「私の人生は不幸から幸せへやな。子供にも恵まれ、一人もグレた子がおらんのが一番幸せや。私にはひ孫までおる。」

「人生は悪いほうは抜いて普通ですね。そう思わなあかん。悪く思ったらきりがないからな。自分のもって生まれた運命やからな。そんなに悔やんでもね。ただ思い出さないようにしているだけです。」

「私の人生は幸せでした。親にも恵まれ、兄弟にも恵まれ、主人にも子供にも恵まれて。こわれた体は元にはもどりませんが、それ以上に人生いろいろそろって幸せやったなと思います。」

(尼崎公害患者たちの語りから)

人は、生まれ、育てられ、結婚し、そして子どもを生み、育て、老いていく。そういう自然的人間としての、社会的人間としての道筋がある。昔も今も。

しかし、その道筋を彩るさまざまな要素は時代によって変わらざるを得ない。また、この普通とも思えることが、できない人もおれば、この普通とも思えることをあえて選ばない人もいる。

「ライフコースの多様化あるいは規範的ライフコースの喪失は、個人にとっては選択の幅の拡大であり、一見すると自由の増大のように思われ

る。しかし選択は個人に深い苦悩と迷いを与えるし、選択肢の存在は必ずしもそれに自分の手が届くことを意味しない。それゆえに現代人はライフコース＝人生にますます真剣に関心を持たざるをえない。」(三沢 1989: ii)

日本社会は、この100年間に急速な近代化・産業化を達成した。しかしその歩みは豊かさと同時に、戦争や公害による多くの被害者を生み出した。また、産業構造の変化は、都市移動や職業移動という形で、人びとの生活に大きな変化をもたらした。人々は、当初予定されていた人生の歩みを、あるいは親と順繰りであった人生の歩みを変更せざるを得なかったのである。

筆者は、2003年の夏、「尼崎公害患者・家族の会」(以下「患者の会」)の会長および現在の活動を担っている「幹事会」のメンバーからライフヒストリーをうかがう機会を得た。対象者は当時50代後半から80代の16人である。まさに日本の近代化と産業化の時代を生きた人びとであり、戦争体験や公害被害者としての体験など、日本の近代化がもたらした影の部分のために、人生行路を大きく変えざるを得なかった人々でもある。彼らの語りのなかには、時代の流れに弄ばれながらも、自分の人生を着実に生きてきた姿を見出すことができる。そして、その生き方を通して人生について、社会について、環境について、自分なりの意味づけと納得を得ている生き様があった。

当初、この調査は「戦後日本における環境観の変化—開発側と住民運動側のライフコース比較か

ら」(杉本 2003)で残された課題、人びとのライフコースと自然観のかかわりの分析を深める意図を持って行ったものである。しかし、対象者のあまりにも多様な人生行路は当初設定していたライフコースと自然観という枠組みには収まりきらないものであった。本稿は、この16人のライフヒストリーを分析するもう一つの枠組みを作るための試論である。以下ではまずライフコース研究とライフヒストリー調査の関係を整理し、ついで尼崎公害患者に対する今回の調査の概要を紹介する。そのうえで、今回の調査から考えられる公害患者のライフコース研究の分析枠組みを検討、提示したい。

2 ライフコース研究とライフヒストリー調査

2.1 ライフコース研究とは

「ライフコース (life course) とは、個人が年齢別の役割や出来事 (events) を経つつ辿る人生行路 (path-ways) をさす。」(森岡 1996: 1)

このような人生行路の研究への関心が高まるのは、それまでとは異なる人生行路を人々が取るようになる場合である。ライフコース研究の先駆的なものとされる『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』が生まれたのも急激な都市化を経験しつつあったシカゴにおいてである。この手法は、その後ケースの代表性が問題とされるなど、統計学的な調査が主流をしめるにつれて見過ごされていく。しかし社会の価値観が変動する、1960年代において再びアメリカで取り組まれるようになった。代表的研究であるエルダーの『大恐慌の子どもたち』は、「大不況→家族システムの状況→子どもたちのライフコースへの影響への差異という下降的因果関係の図式が明らかにされるとともに、…集合体としての彼らのライフコースのパターンが地域社会あるいは全体社会の社会

構成にいかなる上昇的因果力をもつかについての理論的、方法的な可能性を示した」(正岡 1996: 198-199)とされるように、歴史的変動や社会的趨勢と個人との関係を上昇的、下降的双方の因果関係として総合的に分析することを目指すものであった。

日本においても、1970年代から研究が始まっている。ライフコース研究の視点は「(1) 個人の人生を生涯発達 (ライフスパン・ディベロップメント) という観点からとらえるという点。発達過程の多様性に注目し、…発達の生理的・心理的・社会的過程の相互作用が形づくる多様な発達の変化のコースを明らかにしようとする。(2) …個人の役割移行過程の研究に焦点をおく。役割とのかかわりでみれば、個人の一生は役割の取得・変容・放棄の過程としてとらえられる。ライフコース研究はこの過程に注目し、この過程を社会的・歴史的な文脈との関連の下でとらえようとする。(3) 個人のライフコースを歴史的時間のなかでとらえる傾向が強いという点である。ライフコース・アプローチは、そうした歴史的経験の影響を解明することを重要な課題としているが、特徴的なのは、その解明にコーホート分析を用いることが多いという点である」(三沢 1989: iii-vi)。つまり、この研究が成立するためには、分析対象としての自立した個人が生涯発達できる社会の存在が必要である。日本でもすでに、近代産業国家の成立によって家族や地域共同体から独立した個人が性・年齢階梯にしたがって編成されるという社会構造が形成されており、さらに長寿化の進展は生涯発達の概念を妥当なものとした。「発達の個人差が大きく現れる人生の後段階が伸びたため、…個人化・個別化と呼ばれる動向が加わって、個人に注目することが適切な事態となったのである。」(森岡 1996: 2-3)

ところで、ライフコース研究の手法としてコー

ホート分析を用いるということは、大量の調査データを出生時や就職時などをもとにしたコーホートに分類し、そのコーホート毎の人生行路の違いを分析することを言う。また、戦争や大恐慌など特別な歴史的時間を異なったライフステージにおいて経験した人々を比較することで、これらの出来事がライフコースにどのような変化を生み出したかを分析することも可能である。と同時に、ライフコースの研究は、このような大量データを扱う場合のみでなく少数の事例研究からも重要な知見を得ることができる。たとえば、「一定コーホートに属する人々が青年期あるいはそれ以後に社会変動の影響を受け、その結果、能力や性格にどのような変化が生じたかという問題、つまり成人社会化 (adult socialization) の問題……戦時下の小学校で軍国主義的教育を受けた人々の戦後を追跡するような、全社会的な大きな問題があり、そのほか、生活クラブなどのサークル活動によって参加者がどのように変わったのか」(森岡 1996: 8) などである。今回調査対象とした「患者の会」のメンバーも中年期における社会活動によって参加者がどのように変化したのかという視点からの把握が可能である。事例研究をもとに、被害や運動と個人との相互関係を分析しうると考えられる。

2.2 中高年期の人生行路の分析

中高年期に向かう人々のライフコース研究の代表例として挙げられるのが、プラースの『日本人の生き方』(1985年)である。この研究は、日本人の成熟のレトリックを理解するために、阪神間にすむ4人の日本人のライフコースをその人の生き様と連動する4つの小説の登場人物のライフコースと対比しながら日本人の中年期の生活を分析したものである。そして、この研究でプラースが採用した分析の用具が、「道筋」、「道づれ」、「持

続的な自己イメージ」という概念であった。「…文化、性格、関与者といった、より概括的で静態的な観念を修正して、人間の成熟に内在する時間の奥行きの問題をきわだたせるような分析用語に書き直してみようという意図に基づく、ということである。そういうわけで、文化的価値一般について語るかわりに、私は道筋 (pathways) について語ることにしよう。それは、人々が文化的価値をみずから実現していくためのライフコースの方向指示を意味する。関与者一般のかわりに、私は道づれ (convoys) について検討しよう。それは、ある人の人生のある段階を通じてずっとその人とともに旅をしていく親密な人びとの独特の集団を指す。性格のかわりに、私は持続的な自己イメージ (perduring self-images) に焦点を合せよう。それは、主としてこのイメージに導かれながら人が自分の進路を決め、人生のかじをとっていき、そういう重要な指針の役割を果たすものである。」(プラース 1985: 24)

この3つの概念をライフコース研究に当てはめる場合に重要となるのは、これらが個人と社会との相互関係のなかで変容していくことである。「文化的な道筋が人間の性格に方向性と奥行きを与えるとすれば、ある道筋を放棄するということは、人を混乱におとし入れ、人格の統一性を脅かす危険をとまなわざるを得ない。」(同上: 104) のだが、その道筋を放棄せざるをえない人びとが増加することは文化的道筋そのものを変化させる。また、「道づれとは、ある人の人生を助けかつ監視する一種の委員会、あるいは特殊な利害関係集団である。」(同上: 200) であるのだが、道づれがある個人の生き方に影響を与えると同様に、ある個人の生き方にしなだつて道づれの生き方も変化せざるをえないという関係が形成されるのである。文化的な道筋にどう対応するのか、道づれとの関係の中で自分をどう位置づけるのか、それを

決定するのが持続的な自己イメージである。そして、どのような自己イメージを形成するかは、文化的道筋や道づれが大きくかかわっている。ちょうど「とても甘やかされた娘」であった女性が、結婚にともなう変身で苦しむなかで一人前の主婦として自己形成していくように。

2.3 ライフヒストリー調査の意義

ライフコース研究は、社会と個人との相互関係を解明するものである。個人を出発点としながらも、そのなかに一つの類型を見出すこと、世代による差異を発見すること、人生を区切る要因を見出すことなどが目的となる。それに対して、ライフヒストリーは、より個人の特性に注目した研究である。ライフヒストリーに関する社会学の研究は、ひとつの調査手法にとどまるものではない。しかしここでは、ライフコース研究の重要な調査手法の一つという視点から、ライフヒストリー調査を見ておきたい。

「ライフ・ヒストリー（生活史）とは、個人の一生の記録、あるいは、個人の過去から現在にいたる研究のことである」（谷 1996：5）。谷は近年のライフヒストリー法の再評価の背景に「現在社会の異質化」と「生活世界の多元化」の増大、深化があるとみる。つまり、既存の解釈枠組みではとらえきれない他者や異文化の分析を始める手段としてライフヒストリー法が再評価されるようになったというのである。ライフヒストリー法は、個人の生活世界に焦点をあてるものだが、個人のみならず、マクロな組織、制度、システムも視野に入れ、個人史と社会史、主観的世界と客観的世界の連動関係を把握しようとするものでもある（同：iii）。

ライフストーリーの素材には、自伝、伝記、日記などもあるが、最近では口述史の聞き取りがライフヒストリー法の中心的な方法となってきた。

調査者は、対象者と何度かの対話を繰り返すなかで、その人の生活構造の変化を把握し分析していく。調査者は対話をテープに取り、それを時系列と因果関係によって再構成していく。そのことによって、対象者の語るライフストーリーが調査者との共同作業としてのライフヒストリーに再編されるのである。

ライフヒストリー法は、「①…時間的パースペクティブを内蔵しているので、対象を過程として把握することが可能であること、②全体関連的な対象把握を指向すること、そして③主観的現実には深く入り込み、内面からの意味把握が可能であること」（同：11）という特性を持ち、話者との信頼関係と長時間にわたる濃密なインタビューの結果として、「濃い記述（thick description）」を行うことができるのである。私たちはライフヒストリー法によるモノグラフを読むと、ある人をめぐる生活世界の全貌、当人の生活世界の意味づけやその変化、さらにはそのなかで形成される内面世界とその変容を理解することができ、深い感動を覚えることになる。ライフヒストリーの手法は、ある社会現象を総体として提示し、さまざまな仮説を索出していくための源泉となる。既存の解釈枠組みでは対応できない、異文化理解、マイノリティの生活構造の把握などにおいてライフヒストリーはもっとも大きな力を発揮するゆえんである。

このような点から、ライフヒストリー調査はライフコース研究にとってますます重要な手法となってきた。人々の生き方が多様化し、その主観的意味づけも異なる現代社会においては、ライフコースを区切るイベントを再検討したり、イベントの重要度の変化を把握するためにも、ライフヒストリー調査は欠かせない。ライフヒストリー研究の立場から、「…ライフサイクル上の一定の共通性を軸に、比較の枠をつくりあげようとしているのがライフコース論である。その点において、ラ

ライフコース論は、ライフヒストリーのテキストを切り分けて整理する分類箱として、一定の役割を果たす。この接点において、ライフコース論とライフヒストリーの実践とは、協力の関係をむすぶであろう。他方で粹それ自身の意味に対する再検討を、ライフヒストリーのテキストは要求してゆくかもしれない。たとえば同じ軍隊経験にしても、その受け止め方や自分の人生への取り込みは異なる。それらは、分類箱の箱づくりに動員された背後仮説そのものを明示化させることを求めるだろう。そうした作用－反作用までふくめてライフコース論とライフヒストリーは、ありうべき可能性において協力しうるととらえねばならない。」(佐藤 1995: 22) ののである。

3 尼崎公害患者の分析枠組みの構築に向けて

3.1 尼崎公害と公害患者・家族の会

尼崎市は、戦後復興期から高度成長期にかけて日本中に悪名高い公害都市の一つであった。臨海部に集積する火力発電所や工場群の排煙が南西の風に運ばれて市域南部に深刻な大気汚染をもたらし、多くの住民が気管支喘息などの呼吸器疾患に苦しむことになる。さらに、国道43号や阪神高速道路西宮線の開通によって、自動車による大気汚染も加わった。1970年12月には市南東部が「公害に係る健康被害の救済に関する特別措置法」の第1種指定地域となる。ついで「公害健康被害補償法」のもとで74年11月には、指定地域が拡大し、市域のほぼ2/3が指定地域となった。しかし、大気汚染の態様に変化したとして「新補償法」が88年3月から施行される。第1種地域の指定解除によって新規患者の認定は行われなくなった。既認定患者については、従来どおりに療養費、障害補償費、遺族補償費、遺族補償一時金等の補償給付が行われている。なお、尼崎市におけ

る認定患者数は11,208人であるが、3,000人以上が死亡しており、期間満了、転出などによる異動もあって、2003年4月末の実認定患者数は2,876人である。

「患者の会」は、補償法による認定患者本人および患者を持つ家族を構成単位として1971年に結成された¹⁾。最も多い時には1,100世帯が構成員であったが、認定患者の死亡などで会員数が減少し、現在は500世帯程度となっている。1988年に「患者の会」の483人が原告となって、企業9社と国、阪神高速道路公団を相手に「環境基準を超える汚染物質の排出差し止めと約117億円の損害賠償」を求めて神戸地裁に提訴した。千葉、西淀川、川崎、倉敷に続く尼崎公害訴訟として、大気汚染に対する公害訴訟の一翼を担う。99年には企業9社との和解が、2000年12月には、国・公団との和解が成立した²⁾。しかし、2002年には和解条項不履行を理由に原告団があっせんを申し立て、2003年6月原告側の主張をほぼ認める形であっせんの合意が行われている。

会則によると「患者の会」は、「公害被害者はたがいにはげましあい、助けあい、良い医療を要求していくとともに、いのちとくらしを守るため、公害をなくし、住みよい環境をつくることを目的」とする。そして、目的を達成するために、

- 1) 公害患者にたいするよい医療と生活保障などを要求する運動
- 2) 公害被害にたいしては、国・公団と自治体にその具体的対策を要求し、その実現のための運動
- 3) 公害そのものをなくしていくために、他の団体、組織との連携
- 4) 公害防止対策の強化と公害被害完全救済のための運動

を行うものである。

会の役員は、総会で選出される会長、副会長、事務局長、事務局次長、会計、会計監査と支部総会で選出される支部長、副支部長、支部会計、班長で構成される。そして、総会選出役員と、支部長が幹事会を構成している。また2003年からは総会選出役員および幹事会選出幹事による常任理事会が設置された。また、患者以外の住民による尼崎ひと・まち・赤とんぼセンター会員も設定されている。

「患者の会」は裁判闘争だけでなく、近年地域環境再生に向けた取り組みも始めている。1996年には阪神淡路大震災後の地域復興もにらんで、道路改造、運河交通網の整備、健康回復センターの新設、尼いも³⁾再生プロジェクトなどを内容とする「後世にのこそう 美しい運河のまちー尼崎南部再生プラン」を発表した。企業との和解成立後は「尼崎南部再生研究室」を設置し、そこを拠点に大学や企業とも連携して再生に向けたイベントの開催や情報交流を行っている。また、尼い

もの復活に向けて、栽培の歴史をたどり農家と連携して栽培を開始した。さらに、「センター赤とんぼ」を整備し、患者の健康増進や生きがいづくり、地域住民との交流活動などを行っている。

3.2 調査の概要と対象者の属性

生活史調査は、数度にわたる会長や事務局への聞き取り調査、幹事会や総会の傍聴などによって、「患者の会」の組織概要、運動の経過と特質、活動メンバーの属性などを把握したうえで実施した。対象者は「患者の会」幹事会の構成員である。2003年7月～9月にかけてセンター赤とんぼに当番として来ている日時にあわせてアポイントを取り、その会議室で聞き取りを行った⁴⁾。調査項目は表1の通りで、出生、就学、就職、結婚、出産・育児、退職などと続く人生の流れの中に、発病、認定、患者会への入会、活動、訴訟などの公害被害と運動にかかわる項目、それぞれのライフステージにおける環境にかかわる項目など

表1 「患者の会」メンバーへの調査質問項目

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. あなた、いつどこで生まれましたか。 2. 両親や家族のことについて教えてください。 3. 子ども時代の環境や思い出を話してください。子ども時代に遊んだ場所や心に残っている風景を教えてください。 4. 子ども時代は将来どんな仕事につきたいと思っていましたか。 5. 学校はどこへ行きましたか。学校時代に心に残っている先生や友達はいませんか。 6. 学校卒業後どんな仕事につきましたか。仕事の思い出を話してください。 7. 結婚は何歳ですか。相手や子どものこと、家庭生活で楽しかったこと苦しかったことは何ですか。 8. 尼崎市にはいつ頃から住んでいますか。住んでいた場所や住宅の状況を教えてください。 9. 当時の尼崎の環境はどうでしたか。空気、水、緑、騒音など全てについて話してください。 10. 体の調子が悪くなったのは、いつ頃からですか。初期の症状やその後の経過、治療の状況などを教えてください。 11. 公害患者の会にはいつ入会しましたか。会に入ったきっかけを教えてください。 12. あなたは訴訟の原告になりましたか、なった理由、ならなかった理由を教えてください。 13. 患者の会では、どのような活動をしてきましたか。活動のなかで特に思い出に残っていることはありますか。 14. 患者の会で活動することに対して、家族や近所の人はどういいましたか。 15. 和解が成立してから、生活は変わりましたか。 16. 今の生きがいは何ですか。また、現在の尼崎の環境をどう思っていますか。 17. あなたが一番尊敬している人は？一番頼りになる人は？ 18. あなたが一番好きな風景は？ 19. あなたの人生を一言で言うと、どんな人生でしたか。 20. 尼崎の子どもたちに伝えたいことは？ |
|---|

を組み込んだ形で行っている。聞き取りに際しては、対象者にこの調査票を一応提示したが、人生の流れにしたがって自由に話してもらった形を取った。

聞き取り調査対象者の出生年は、1920年代が6人、1930年代が5人、1940年代が4人と高齢者が多い。性別は男性が3人、女性が12人であり、尼崎の認定患者、そのなかでも「患者の会」のメンバーとして活動している人々を反映する構成となっている⁵⁾。1人を除く14人が訴訟の原告であった。出身地は、尼崎市が2人のみで、近畿圏が5人、四国・九州が6人、北海道、朝鮮半島が各1人である。また、多くの人が重要な他者と位置づけているM会長についても、これらの対

象者と対比するために、生活史の聞き取りを行っている。

対象者15人のライフコースの骨格は表2に示すとおりである。上段にはライフイベントを、下段には居住地を示している。ここでは、まずこの15人のライフコースの概要をA) 戦争以前に職業生活を開始し社会人として戦争を体験している世代、B) 戦争中に学齢期を過ごし終戦後に成人として活動を開始している世代、C) 戦争の記憶を持たない終戦後に学校教育を受けた世代に区分して、簡単に紹介しておく。なお、以下の①などの数字は、表2の対象者番号を示している。

戦争前に社会人になっている4人(①～④)は、都市雑業層の子どもとして生まれた一人を除

表2 対象者のライフコース

	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
①男	出生 (滋賀県水口)	就職 (大阪市)	兵役 (水口)	結婚 就職 (尼崎)	労組役員		発病 認定 退職	副会長	
②女	出生 (大阪市此花)	就職 (尼崎)	同棲	結婚・出産	発病		認定	副支部長	
③女	出生 (北海道空知)	(広島)	尼崎へ (久留米)(広島)	結婚 (尼崎)		発病 認定			
④女	出生 (奄美大島)		就職 結婚 (滋賀)(奄美)		発病・認定 (尼崎)				
⑤女	出生 (朝鮮半島)	(山口)	結婚		夫死亡 就労 発病 (尼崎)		認定		
⑥女	出生 (兵庫県)	多可郡	就職	結婚 (尼崎)	発病 就職	認定		定年 支部長に	
⑦女		出生 (尼崎市築地)	就職	結婚	(西宮宝塚)(尼崎)	発病 認定			
⑧女		出生 (奄美大島)	農業	結婚 (鹿児島)(尼崎)	発病	認定			
⑨女		出生 (佐賀県)	(長崎・福岡など)	結婚 離婚 (尼崎)	再婚	発病認定			
⑩女		出生 (神戸市)	(奈良県宇陀郡)	就職 結婚 (神戸)(尼崎)	飲食店 発病	認定		支部長に	
⑪男		出生 (大阪市東成)	(高知)	就職発病 (尼崎)	結婚		転職 認定	定年 支部長に	
⑫女			出生 (今治市離島)	就職 (今治市)	結婚 発病 (尼崎)	認定		夫死亡	
⑬男			出生 (鹿児島県甑島)	就職 (愛知)		転職 結婚 (尼崎)	発病 認定	定年 副支部長に	
⑭女			出生 (尼崎市立花)	(城内)		結婚 (大物)	発病 認定		
⑮女			出生 (鹿児島県)	(塚本)	就職 (大阪)	結婚 発病・認定 (尼崎)			

いて、農漁村地域の生まれである。小学校卒業後、近畿圏で工場労働者などとして働いた経験があり、兵役や軍の徴用、空襲など戦争体験を持つ。一人を除き1950年代には尼崎に移住しており、そこで公害被害に会う。男性は工場労働者、女性も家事・育児のかたわらパートとして働いてきた。尼崎公害訴訟の提訴時には60代であり、活動の中心メンバーであった。後期高齢期に達した現在は、呼吸器疾患のほかにも身体的問題をかかえながら、患者の会とかかわっている。

学歴期に戦争体験をした7人(⑤~⑪)の出生地は、近畿圏から九州・奄美大島、さらには朝鮮半島まで幅広い。出身階層も貧農から中農、雑業層、工場労働者、中産階級まで多彩である。戦争によって生活環境の激変を経験しているものも多い。学歴も、小学校を出てないものから、女学校や高等学校卒業生まで多彩である。ほとんどの女性が自営業やパートとして働き続けているが、子育て期に喘息発作に苦しめられている。訴訟が始まったころはまだ仕事継続中であった。運動最盛期には退職し、支部長、副支部長として現在まで活動を支えている。

戦後世代である4人(⑫~⑮)は、四国・九州生まれと親が尼崎周辺に移住してきた労働者の2タイプがある。男性の場合中卒後、就職先を転々として尼崎にたどり着いており、女性は結婚で移住ないし結婚後も尼崎居住というパターンである。疾患を抱えながらの就労やパート労働は上の世代と大きな違いはない。現在50代後半から60代という彼らは、和解成立後に活動に参加し始めたメンバーとなっている。

4 公害患者のライフコース研究に向けて

4.1 分析のポイント

以上の対象者の属性を踏まえると、尼崎公害患者のライフコースを分析するうえで筆者が重要な

ポイントとして設定するのは以下の項目である。

(1) 公害患者、環境運動家としての経歴

幹事会のメンバーの多くは、戦前から戦後の日本の高度成長期を生き抜いてきた工業労働者(またはその妻)や都市雑業層である。学歴も所得階層もあまり高くない人が多数派を占める。それらの人々が公害患者となり「患者の会」の活動に参加し、活動を担うことで独特の中高年期を過ごしてきた。彼らには、職業経歴や家族経歴に加えて、公害病への罹患と治療という病人経歴、患者会でのさまざまな活動という運動経歴を持つ。この2つの経歴が彼らのライフコースにどのような影響を及ぼしたのかを明らかにすることが最大の分析のポイントとなる。また、彼らが患者となった社会からの彼らへの下降的因果関係だけでなく、彼らの存在が環境対策を生んでいくという上昇的な因果関係を探ることも興味深いテーマである。さらに、公害地域を独自の価値観で生きている『口述の生活史—或る女の愛と呪いの日本近代—』(中野 1977)の「奥のオバアサン」や、『証言 水俣病』(栗原 2000)に登場する水俣病患者とのライフコースの類似や違いを探ることで、時代的、地域的違いを検討することも必要であろう。

(2) 地域移動とさまざまな道づれ

公害患者の多くは農山漁村からの尼崎市への移住者である。彼らを尼崎に導いた移住の理由と移住後のライフコースの変化を比較することも興味深いテーマとなる。都市移住に関しては、親族ネットワークやチェーンマイグレーションなどで示されてきたように、移住をもたらした道づれがいる。また、人々は移住地で新たな道づれを見出した。彼らに特有な点は、「患者の会」のメンバーとなることで、互いに重要な人生の道づれとなったことである。ライフコースにしたがってどのような道づれが人生の意味づけを与えたのか、「患

者の会」という道づれは彼らの人生をどう規定し、逆に彼らの生き方が「患者の会」のあり方をどう規定しているかを探ることも重要な視点である。活動を行う彼らを支える夫や子どもなど、家族との関係も見逃すことはできない。

なお当初の目的であった道づれとしての自然もはずせない視点である。プラスによる道づれは、本人に影響を与え、本人から影響を受けながら人生行路とともに歩いていく人を意味する。しかし、そのような人間形成に重要な影響を与える道づれは人間だけとは限らない。ある地域の風土や自然環境も、そこに住む人々の生業や文化を規定するという意味で重要な道づれとなると筆者は考えている。尼崎の汚染された大気を公害患者は人生の道づれにせざるを得なかったともいえるのである。ここでは、公害患者のライフコースの基底に存在した自然環境とその変化を把握する。その道づれとしての自然環境を踏まえながら、環境運動を支えている自然観・環境観の形成変容過程を、地域移動や尼崎市の環境変化とも関連させながら分析することにしたい。

(3) 生命観と人生の意味づけ

近代産業社会は、老いと死を身の回りからできるだけ遠ざけようとする社会でもある。若さや元気さの維持が重要な価値として主張され、病気であること、そのために仕事ができないことは、逸脱者の烙印を押されかねない。公害認定患者となり生活費の補助を受けるなかで、彼らはどのように自己の人生を意味づけしたのであろうか。そして、公害闘争に参加することでどのように自尊の心を確立したのであろうか。そこでは社会的な地位低下と個人的な自尊の獲得という2つの転機に注目したい。

「子や孫に青い空を」は「患者の会」のキャッチフレーズである。多くの公害病の先輩が亡くなっていくなかで、子どもや孫に「きれいな環境」

を残そうとする彼らの「命」への思いはどのように形成されてきたのだろうか。根底にある、生命観とそれが形成されてきた過程を探ること、そのことによって、日本の生命観や死生観に触れることも今回の分析では重要である。「老年期は、人びとが大きな喪失を味わう時期である。…日常生活を支える健康や家族関係の喪失、職業活動やそれと結びついた人間関係の喪失などの出来事は、失意、落胆、悲哀などをともない、精神的・心理的な動揺をもたらしやすい。青年期や中年期にはそれほどの大問題と思われなかった「生きがい」が、しばしば老年期に至って切実な問題として立ち現れるようになるのは、まさに老年期がさまざまな喪失の時期であることによる」（三沢 1989: 196）。そのなかで、老いていくことへの受容がどのように生まれてくるのかも探ってみたい。

4.2 公害患者のライフコース分析の枠組み

尼崎公害患者のライフコースは、出身地が大阪都市圏から離れているのかという空間的配置と、出生年および尼崎への移住年という時間的配置によって変化している。

ライフコース分析の基本的枠組みは、加齢による役割変化と歴史的・社会的時間の関連にある。今回の対象者も、戦争という歴史的時間をライフコースのどの時期に経験したか、いつ公害病に罹患し認定を受けたかが、人生行路に大きく影響している。

一般に都市への地域移動では、早期に移住したもののほど都市社会に適合し新たに移住したものが下層に組み込まれる。阪神都市圏への労働力移住は、当初近畿圏から始まり次第に西日本や沖縄、朝鮮半島などへ拡大していった。出身地は、移住地での生活を有利に展開するか否かを決める重要な要因ともなった。さらに、戦後の混乱期には、出身地によって（国籍が違うなど）より不利な立

場に置かれた人々もいる。出身地との関係で言えば、大阪都市圏周辺の出身者は都市的ライフスタイルに適合しやすく、既存の親族や友人ネットワークを利用しやすかった。他地域からの流入者は、都市的ライフスタイルへの適合に遅れ、移住地でのネットワークの弱さを同郷団体など出身地のネットワークによって補完した。両者のライフコースは当然変わらざるを得ない。

以上から、尼崎公害患者のライフコース分析の枠組みを、空間的配置と時間的配置を念頭に置きながらも、彼らの社会的関係および文化的背景に注目して、中心と周辺、都市的メンタリティと農村的メンタリティに設定した。中心と周辺は地理的な位置づけとともに権力との関係や社会階層における対象者の位置づけをも意味する。そして都市的メンタリティと農村的メンタリティは生家の職業をベースとしながらも個人志向と共同体志向をも考慮した区分となっている。歴史的時間のなかでこの2つの軸がどのような関係にあるのかをイメージ的に示したのが図1である。

この2つの軸で構成されるそれぞれの象限に該

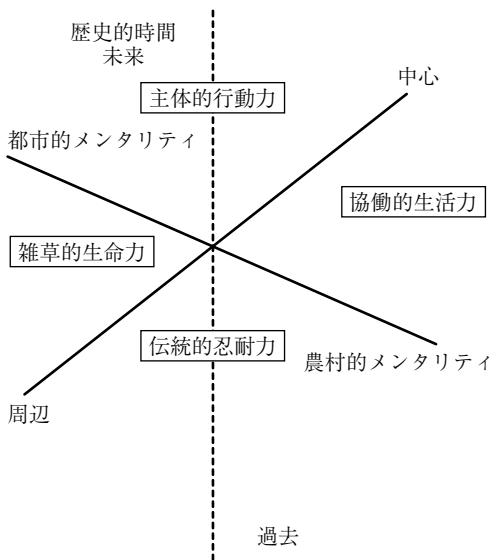


図1 分析枠組みのイメージ

当する4人のライフコースを簡単に紹介すると以下ようになる。

○M 会長（主体的行動力）

尼崎市生まれ：家は飲食店経営：女学校時代に戦争経験：大企業で労働運動経験：労働運動の活動家と結婚：自分および家族の公害病発病により患者会を結成して運動開始：運動のリーダーとして会員を導く

地付きの自営層の出身であり、高学歴・労働運動経験という中心との近接性と都市的メンタリティが運動リーダーとしての彼女のライフコースを決定づけた。

○M さん（協働的生活力）

兵庫県の播州地域生まれ：家は中農：戦争による苦労は経験していない。女学校卒業後農協に就職：ヤンマーの熟練工と結婚して尼崎に移住：公害病発病後も競艇場に勤務・労働運動も行う：退職後患者の会の活動を積極的に行っている

近畿圏の農村出身で学歴も高い。結婚相手は熟練工だが、次男が故郷で農家を継ぐなど農村とのかわりが強い。その意味で農村型リーダー層のメンタリティを引き継ぐ。運動においても会長の支援者の役割を果たす。

○S さん（伝統的忍耐力）

鹿児島県の奄美大島生まれ：家は兼業農家。高等小学校卒。終戦後の混乱のなかで農業をしながら極貧の生活を経験する。20歳で鹿児島に移り大島紬を習う。その後大阪に移住し、奄美出身の工員と結婚。公害病に苦しみながら子育てとパート労働。夫に遠慮して活動参加も少なく、訴訟原告にもなっていない。夫の死後はぎりぎりの年金ぐらしのなか、活動の手伝いをしている。

周辺部の出身であり、価値観や夫婦関係も伝統的。「身を粉にして奉ずべし」を信条につつましかな生き方をしており、活動においてもサポー

トに徹する。

○Yさん（雑草的生命力）

佐賀県生まれで長崎の炭鉱育ち：被爆時に長崎周辺におり、小学校も卒業できていない。18歳で炭鉱労働者と結婚。その後夫の仕事を求めて尼崎に移住するが夫の遊びがひどくて離婚。再婚した夫と飯場の仕事などをしながら生計をたてる。その間に発病するが夫が死に生活のために仕事を続ける。活動は出てきてといわれれば出る程度だが、反権力の意識は強い。

周辺部の出身であり、農村でも都会でも雑業によって生活を維持してきた。苦労に勇敢に立ち向かい雑草のように生きてきた。公害病や活動もその一つというたくましさを持つ。

簡単な分析であるが、この枠組みによってライフコースの違いを一定程度解明しうる感触を得た。この枠組みをもとに、性や出生コーホートによる違い、環境観の違いなど、詳細な公害患者のライフコースの分析を進めることにしたい。

〔注〕

1) 患者会は当初、認定患者への対応を考える医師や学者の呼びかけで結成される。「患者が1人でも大

変なのに、2人、3人ならさらに大変」と加入は世帯単位となっている。結成後まもなく、患者の実態を知らない人々のかかわりには限界があることから、患者で労働運動の経験もあるM氏が会長兼事務局長になる。そして現在まで活動をリードしてきた。

- 2) 企業との和解によって、解決金として約24億円が原告団に支払われた。このうちの9億円は「患者の会」のために使用されることになっており、「センター赤とんぼ」や「南部再生研究室」が作られている。また、国・道路公団との和解では交通規制など環境対策を進めることを条件に損害賠償を放棄している。
- 3) 尼いもは尼崎南部特産の甘藷で、江戸時代から栽培されていた。明治時代には尼崎を代表とする農作物となるが、工場建設により作付面積が減少し、1934年の室戸台風で滅亡したとされる。
- 4) 「患者の会」の役員は会長1名、副会長4名、支部長15人、会計監査2人で構成される。常勤スタッフは会長と事務局2人である。「センター赤とんぼ」の管理は支部長と副支部長から当番を決め行っている。今回の聞き取りは、「患者の会」の役員会で調査を依頼し、そのとき応じてくれた人々が当番に来る日にあわせて実施した。
- 5) 1988年以降認定が行われていないため、尼崎市の公害認定患者は全て15歳以上である。子どもや高齢者が被害を受けやすいため、15～34歳の人々が35%、60歳以上が48%をしめている。男女比は全体では4:6であるが、60歳以上では3:7となり女性が圧倒的に多い。

〔参考文献〕

- Clausen, J. A., 1986, *The Life Course: A Sociological Perspective*, Prentice-Hall Inc (=1987, 佐藤慶幸・小島 茂訳『ライフコースの社会学』早稲田大学出版部。
- Elder, G. H., 1974, *CHILDREN OF THE GREAT DEPRESSION*, Social Change in Life Experience, The University of Chicago Press. (=1986, 本田時雄・河浦康至他訳『大恐慌の子どもたち 社会変動と人間発達』明石書店。)
- Hareven, T. K., 1982, *Family time and industrial time*, Cambridge University Press. (=1990, 正岡寛司監訳『家族時間と産業時間』早稲田大学出版部。
- 井上 俊, 1996, 「物語としての人生」『岩波講座 現代社会学 第9巻ライフコースの社会学』岩波書店。
- 栗原 彬編, 2000, 『証言 水俣病』(岩波新書) 岩波書店。
- 正岡寛司, 1996, 「ライフコース研究の課題」『岩波講座 現代社会学 第9巻ライフコースの社会学』岩波書店。
- 三沢謙一他, 1989, 『現代人のライフコース』ミネルヴァ書房。
- 森岡清美, 1996, 「ライフコースの視点」『岩波講座 現代社会学 第9巻ライフコースの社会学』岩波書店。
- 森岡清美・青井和夫編, 1987, 『現代日本人のライフコース』日本学術振興会。
- 中野 卓, 1977, 『口述の生活史』お茶の水書房。
- Plath, D. W., 1980, *Long Engagements Maturity in Modern Japan* (=1985, 井上 俊・杉野目康子訳『日本人の生き方』

岩波書店.

佐藤健二, 1995, 「ライフヒストリー研究の位相」中野 卓・桜井 厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.

杉本久未子, 2003, 「戦後日本における環境観の変化－開発側と住民運動側のライフコース比較から－」『同志社社会学研究』7.

高島秀樹・岩上真珠・石川雅信, 1994, 『生活世界を旅する』福村出版.

谷 富夫, 1996, 「ライフヒストリーとは何か」谷 富夫編『ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社.

〔参考資料〕

尼崎公害患者・家族の会, 2003, 「第 32 回定期総会議案書」

尼崎市役所, 1970, 「尼崎市史」第 3 卷

尼崎大気汚染公害訴訟原告団, 1999, 「尼崎大気汚染公害訴訟最終意見陳述集」